

市民への回帰：ヘルマン・ヘッセの『荒野の狼』におけるハリー・ハラーと市民との懸隔について

著者名(日)	市岡 正適
雑誌名	埼玉医科大学進学課程紀要
巻	5
ページ	1-8
発行年	1989-04-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1386/00000082/

市民への回帰

——ヘルマン・ヘッセの『荒野の狼』における

ハリー・ハラールと市民との懸隔について——

市岡正適

序章 『デミアン』、『シッダールタ』、そして『荒野の狼』

埼玉医科大学進学課程紀要第三号所載の論文で、私は、ヘッセが『デミアン』の中で切り開いた「新しい明るい世界」について論じた。この世界は作品世界と対比されるべき世界、あるいはそれを異化する世界であった。そして、そこでは作品世界の現実から「絵画」の世界への移行によって、現実世界からの超越の可能性が示されたのであった。

ただし、『デミアン』における「新しい明るい世界」は、その存在可能性が暗示されたに過ぎない。紀要第四号で私が論じたように、『シッダールタ』において初めて具体的に、この世界に至る道筋と、この世界の様相とが示されたのである。この作品では、真正の「新しい明るい世界」への参入を目指すシッダールタの苦悩と努力が描かれる。そして、拙論において私は、シッダールタの努力を妨害する彼自身の内面的要因を二種類の拘束に要約し、更に、この拘束を克服する方法を抽出した。この拘束の一つは、形式という空間的なものであり、これの克服は形式の枠組を無限大に拡大することで実現された。また、もう一つの時間的拘束に関しては、「瞬間」における「現在」の充満によって、その超克が達成されたのである。そして、この二種類の超克の達成によって初めて「真正の新しい明るい世界」が実現したのであり、永遠を生きる

生がそこでこそ可能になったのである。

それでは、どうして『デミアン』では「真正の新しい明るい世界」に参入する方法論的根拠が提示されるに留まり、『シッダールタ』ではその具体的様相が描出され得たのだろうか。その理由は、『シッダールタ』論で述べたように、この作品の世界が既に「真正の新しい明るい世界」へ至る入口の世界として設定されていることにある。この作品の世界の何かが「暗い世界」や「古い明るい世界」、あるいは古い「新しい明るい世界」からの何かによって防害される危険はないのである。シッダールタの父親が息子の家出を容認したのは、この世界の性格上、当然であった。世界の倫理に適った究極の理想を追究する息子の姿勢に対するどんな批判が古い「新しい明るい世界」に生きる父親に可能であろうか。シッダールタの意欲と行為の必然性を阻むことは、父親の棲息する世界の根本倫理に背くことになるのである。悟りの境地に進む道における防害原因は、シッダールタの自我の内部に潜む、父親と同じ次元の古い「新しい明るい世界」の伝統及び因習という残滓のみである。この残滓の払拭の過程が彼の歩んだ道であったのである。

しかし、現実の世界に住まう者にとって「暗い世界」は当然存在する。『シッダールタ』において示されたのは、『デミアン』における「絵画」の世界の問題を解決する過程である。現実世界を基準にすれば、これは一つの仮象の世界での仮の解決に過ぎなかった。

もとより私は『シッダールタ』執筆の成果を否定しているのではない。『デミアン』におけるジंकレールは悟りへの道の入口にデミアンというもしびを持って立ったに過ぎなかった。本当に悟りの境地にたどり着く迄には更に幾多の試練がジंकレールを待ち受けているのである。なぜなら、悟りの境地に達した人の知遇を得ることや、あるいは悟りの境地を直覚することは、それらがそのまま悟りの境地への参入を意味するのではないからである。とすれば、付帯条件を捨象した考察は自らの進べき道のおおよその見極めをつける方法として有益である。『シッダールタ』は一つの特種な条件下において悟りへの道の可能性を追求する試みなのである。そして、『シッダールタ』論で見たように、究めるべき到達目標は確かに確認され得た。空間と時間の超克が永遠の生の実現可能性を実証したのである。この作品は前進の途上において一つの展望を拓いた証なのである。

私が言いたいのは、このことを確認しつつ、思索を更に先に進める必要がヘッセにあった、ということである。ヘッセは現実世界に棲息するのであり、その中で「真正の新しい明るい世界」への参入を可能にすることがヘッセの生の目標であったはずである。そして、この観点からすると、今ここで取り上げる『荒野の狼』こそが、発展的に問題を考察した作品として位置付けられるのである。例えば、小説の冒頭に置かれた編集者の序文の中で、市民の立場から見たハリーの心の悩みに関する考察がなされる。これは、「古い明るい世界」からのハリーの精神へのアプローチである。また、「荒野の狼についての論文」や劇場という仮象の世界ではハリーの精神構造が解剖され、そしてその結果として彼に対する批判がなされる。これは、ヘッセにとつての究極的理想である「真正の新しい明るい世界」からのハリーの精神へのアプローチを意味している⁽³⁾。つまり、主人公の悩みとデミアンによる導きという『デミアン』の場合や、あるいは同じく主人公が独自に悟りの境地に達した『シッダールタ』の場合とも違って、市民社会の中におけるハリーの精神を現実の世界と理想の世界の両方から評価しようとする意図が、このように作

品を構成せしめたことは明らかである。この作品は、ヘッセの主観を複数の視点から客観的に捉え直す試みである。悩みの根源への肉薄、及び、そこからの解放の可能性を、ヘッセは市井のハリーを二極の世界の間に立たせる試みによって追究した、と私は考える。

それ故、ここでの問題点は明白である。それは、市民とハリーとの距離の測定、及び究極的理想の地平とハリーの立つ位置の距離の測定の二つである。この両方を考察することで、ハリーの立つ位置が確認され、現実世界における理想的生の可能性が判断できるであろう、そして、紙幅の関係から、この論文で考察するのはそのうちの一つ、市民とハリーとの距離の測定ということになる。

第一章 市民のハリーとの距離

作者の分身たる主人公を第三者である登場人物に語らせるとするならば、そこには主人公＝作者の性格を浮かび上がらせようとする作者の意図が介在する。しかし、この作品の冒頭に掲げられた「編集者の序文」においては、そのような意図を超えて、本当に一般市民がヘッセに接した際の印象が表現されている可能性がある。なぜなら、第一印象がここで語られているからである。第一印象を生み出す条件は、自分独自の価値規範と倫理観が発動する以前の、固定観念や偏見の入る余地のない状態で、ほとんど直感のみが判断の主導権を握ることである。とすれば、自己を客体化して自己描写を試みる作者が何等かの特別の意図をその第一印象の中で全て語り尽くさせるのは不可能である。そして、この不完全さの故に、逆に第一印象の記述が本当に一般市民の側から見た第一印象を表現する場合が有りうるし、また、ヘッセの側から見たヘッセと市民との懸隔が端的に表現されてしまう可能性があるのである。これが、この第一印象の記述にまず注目する由縁である。

編集者のハリーに対する第一印象は「奇妙なひどく相克した」⁽⁴⁾ものであった、と記されている。反感を抱きつつ好感を覚えるという編集者の矛盾した印象は、端的に言ってしまうと、編集者が安住する市民社会と

ハリーの住む世界との懸隔と近さに由来するものであるのだが、懸隔を露呈する直後の原因となったのは、ハリーが編集者のお婆の家に部屋を借りに来た時に発した「ああ、ここはいい匂いがしますね^(?)」という最初の言葉であった。

これを家の中に漂う臭氣に反応した言葉ではなく、編集者のお婆が後で解説したように家庭の雰囲気⁽⁸⁾に感嘆した言葉であると理解するのは容易である。実際、これは清潔で堅実な生活に対する郷愁の気持ちから出た賛嘆の言葉でありうる。にもかかわらず、この発言はいささか奇妙である。

問題点の第一は、この言葉が本来持つ語感である。この「いい匂いがしますね」という言葉は純粹、無個性の形容ではなく、肯定的表現であれ否定的表現であれ、もっぱら特質や個性を表現する。ハリーが意図した清潔という概念は本来無塵で無臭なのだから、この言葉はそれとは正反対の概念を表現するのが普通なのである。この言葉が突出するのは、それ故である。そうして、この言葉を真正面から受け止めるには、家主の女性のような善意がなければならぬ、という第二の問題点が出て来る。彼女のような善意が介在しなければ、この言葉は、ちょうど編集者がそう理解したように、編集者のお婆の家には普通の市民の家とは違う何かがある、何か市民的ではない、という字義通りの批判にしかとれないのである。そして、そう理解される危険があるからこそ、なおさら、刺を持つこの言葉が相互理解の端緒にもつかぬ状況で用いられたのは尋常ではないのである。緊張を解いて寛ぐ内輪の快適な閉鎖された空間に突然闖入したよそ者が、彼に対して警戒心を抱かざるを得ないでいる見ず知らずの初対面の相手に対してその家をはめる表現としては、この言葉は常識をはずれている。すなわち、この言葉は発せられた状況にふさわしい客観的中庸性を欠いているのである。

市民社会とは別の世界に棲息する人間の行為は、それがいかに世俗の行為規定に則っていても、俗世に同化できない何かをどうしても露呈してしまう。それは、市民の側からすれば、市民社会に対する不遜な匂い

程度のものかもしれない。この「いい匂いがしますね」という発言の場合は、誉めるというハリーの意志ではなく、その意志を表現する手段としての言葉の選択に問題があったのであるが、しかしいずれにせよ、市民からはずれた精神構造及び倫理観を持つ者のみが、こういう時にこういう場所でこういう突飛な言葉を発しうる。そして、この言葉によって、ハリーの市民倫理に適った立居振舞の裏に潜む彼独自の世界の存在が露呈されてしまったのである。編集者のハリーに対する漠然とした反感という反応は、この突出に対するものであり、編集者に即して言えば、それは、表面的な態度の裏に潜むハリーの何らかの異質性を彼が直覚したからにはほかならないのである。

翻って考えてみれば、「ああ、ここはいい匂いがしますね」という唐突な発言をする精神構造と倫理観の特徴は、世間の側からすれば独善である。しかし、この独善は、自分の都合だけを考えるひとりよがりとは少々趣を異にする。その相違は、この独善がごく普通の単語の新しい意味と用法の理解をごく平凡な状況の中で強要するという異化の効果を發揮するところにある。その結果、この独善に直面した編集者は伝統的に固定的な価値規範の見直しを迫られたのではなく、自己完結した彼の市民性そのものが踏みじられる危険に直面したのである。しかも編集者は、自他の個性を尊重する個人主義倫理観によってハリーという異質な存在を承認せざるを得ない。自分が依拠する個人主義倫理観と、まさしくその倫理観を異化の効果によって攻撃する独善との狭間に彼は立たされたことになる。編集者が抱いた不安とは、この矛盾に陥った者の反応なのである。

さて、第一印象の記述は、このような敵対関係による断絶を示唆する否定的なものばかりではなかった。もう一度繰り返せば、彼の第一印象は「奇妙なひどく相克した」ものであった。その一つが反感であった。そして、もう一つは彼をしてハリーの手記の出版をさせる原動力となった好意と好感であった。

編集者がハリーに対して好意や好感を抱いた第一印象の源泉は、ハリ

ーの顔にあったとされる。「それ（ハリーの顔）は、あるいは少し独特で、悲しげであったが、しかし、生き生きとし、思想の非常に豊かな、勉強し尽くして精神化された顔であった⁽⁹⁾」のである。すなわち、ハリーの顔には物事を考え抜いた思索の跡が見えたのである。そしてそれが初めから彼の氣に入ったのである。

しかし、ここで注目されるべきは、このことがそのままハリーと市民との近さを意味するのではないことである。市井の人が自省する時間的余裕を奪われ、暇もなく、日常のさまざまな雑事や仕事上の多くの束縛に追いかける生活をしている間、思索を生業とするいわゆる知識人は、時間的余裕を特権的に持ち、その時間を自分自身のためだけに使い、思索に耽り、あるいは自己の向上を窮めることができる。市井の人からすれば、知識人はハリーでなくとも既に異次元の世界に棲息する人間である。しかも、知的生活の実践の精神的困難さを知っている市井の教養人たる編集者にとっては、そのような異質な生活が可能な人種の存在は、それだけで驚嘆に値する。そして更に、そういう驚嘆すべき人物を隣人として、あるいは知人として持つことは、自己同化の期待感から彼の自慢にもなりうる。編集者がハリーを口説いて高名な文化批評家の講演会に連れていったのは、自分の身近にいる知識人と演壇上の人物との比較を行なって、それと同等、あるいはそれ以上の人間が自分の身近に友人としているという満足感を得たいという欲求があったと考えてもよい。つまり、この思索に対する好感は、市井の教養人から見た専門の知識人に対する驚嘆と憧憬と羨望に起因するのである。そして、それは市井の自分たちの与かり知らぬ何かを知っており、あるいはそれを実践しうる人間に対する畏敬を伴った距離感の表現でもある。

だが、編集者のハリーに対する好意及び好感は思索を生業とする人種に対する畏敬からだけでは説明がつかないことにも注意しなければならぬ。たとえ隣人になっても、棲息する世界の違いを違いとして、個人主義の立場で無関係、無関心が成立することも有りうるからである。実際、編集者をしてハリーに好意、好感を抱かしめたのには、もう一つの要因

があった。それは、ハリーが示した謙虚さと丁寧さである。彼の立居振舞は、「傲りは全くなく、彼の丁寧ぶりと親切ぶりには、なにかほとんど感動的で、いささか哀願的なところがありました⁽¹⁰⁾」と表現されている。すなわち、彼の態度が市民社会に完全に適合しているとされるだけでなく、それがハリーの本性から出た彼の倫理性の表現とされている。編集者は、ここにハリーと市民との根源における同質性を看取したのである。編集者のおばが「ああ、ここはいい匂いがしますね⁽¹¹⁾」というハリーの言葉の含意を注釈して、「清潔さや秩序に⁽¹²⁾」「馴染みがなくなつて、不自由しているように思える⁽¹³⁾」と言うのは、ハリーの出自を暗示すると同時に、ハリーと市民との近さを市民の側から代弁させている。ただし編集者にとっては、同根から派生した茎が成育の経緯によって異なった花を咲かせることは理解を越えていた。彼はハリーのこのような立居振舞を表面的な倫理導守に過ぎないと当初は判断せざるを得なかったのである。そして、ハリーの本性に根ざした自然な丁寧さと親切さが両者の懸隔を喪失せしめる時、編集者はそこで驚異と奇異を伴った好感を抱かざるを得ないのである。ここに、市民との同質性を市民であるところの一般読者に理解してもらいたい、というヘッセの逆説的で悲痛な希望を読み取ってもよい。

ハリーの棲息する世界は、まさしく市民社会である。ただ、彼の世界は一般の市民が常識として考える市民社会の中の知識人の世界ではなく、その異種なのである。そして、正統と異種の接点に、この小説の世界が構築されているのである。

第二章 ハリーの市民との距離

ハリーは極度に孤独である。彼は自分の出自である市民社会の中で市民性に対して秘めた愛着を持ちつつも、しかしその市民社会とは断絶して孤独である。市民社会とハリーが融和する時もあるが、しかし彼はやがてそこに充滿する市民性に我慢できなくなる。そして自分が市民社会に適合しない人間であるという自覚から孤独が更に深まり、彼は市民社

会との懸隔を感じてそこから離れ、自分の殻に閉じこもる。この孤独の原因はハリーの心の中にある市民性と狼性との分裂にあるとされる。そして、この分裂の発端となった教育について「荒野の狼についての論文」の中で説明がなされている。

ハリーは、「愛情深い厳格で大愛敬虔な両親と教師によって、《意志の破壊》を土台とする教育を受けた」⁽¹³⁾のである。しかし、この教育の目論見は成功しなかった。そればかりか、彼の全神経が自分自身に集中されることになった。しかも、その際に意志を破壊するという、彼が受けた教育の方向性が援用され、ハリーは自己憎悪をもって「可能な限りのあらゆる鋭さ、批判、悪意、そして憎しみを何よりもまず最初に、自身自身に向ける」⁽¹⁴⁾ことになった。こうして、教育は「人格の破壊の代わりに、自己憎悪を教えることだけに成功した」⁽¹⁵⁾のである。ここでハリーの心の中の狼性が鍛練されたのである。一方、翻って他人との関係を考えれば、自己憎悪を教えられた教育の思想的基盤であるキリスト教の系譜に則って隣人愛を深く教え込まれたハリーは「自己を愛することなくして、隣人を愛することもまた不可能」⁽¹⁶⁾となり、隣人との接点が失われ、「ついには、どぎつい利己主義と同じのおぞましい孤独と絶望」⁽¹⁷⁾に彼は陥ったのである。こうして「私がそれまでどんな人にも見なかった程、非社交的」⁽¹⁸⁾であり、「非常に内気な人」⁽¹⁹⁾であったという編集者の目を通して見たハリーの性格の外見的特徴が形成されたのである。

ハリーの心の中の狼性と市民性との分裂の必然性がこの自己憎悪から自己否定に至る経緯によって明らかにするのであるが、ここで注目されるのは、ハリーの孤独の原因には教育という外的条件だけではなく、自己に寄せる評価の高さと強固さ、という内面的要因が大きく働いている、ということである。すなわち、自己嫌悪が嫌悪する対象の存在を前提とする事実、そして嫌悪の対象とする程に自己を評価している事実が注目されるのである。自分にそれほど期待するからこそ、一方で教育という外的条件を自分に対する侵略として拒否する試みが行われ、他方では自己を注視するだけで十分な満足が得られるのである。仮に、そんな

自己に愛想が尽きていれば、すっぱりと独自の自己を無視し、自己形成を既存の教育に依存することで健全な市民の道を開くことが、ハリーには出来たはずである。死に至るまで永遠に続く程の自己憎悪がハリーを苛むのは、彼のそのような自己に対する愛着があればこそなのである。結論を先取りして言えば、この自己に対する強固な評価こそがハリーをして市民社会から乖離させた主因なのである。ハリーの孤独は自己憎悪に因る厭うべき不可避の状態なのではない。それは彼の自己評価の必然的な、そして運命的な結果であったのである。

それ故、ハリー自身が他との交流、接触を意図的に避けていると断定するのは間違いである。例えば、ヘルミーネとの運命的な出会いが町の酒場に設定されているのは、もちろん、偶然性を強調せんとするヘッセの目論見による。しかし、この場面で、彼女に対して心を開く最初の理由として、彼女が自分を「私に必要なだけいたわって扱ってくれ」⁽²⁰⁾とあるのは、偶然からでも自分を理解してくれる者を発見したいというハリーの期待から出た言葉以外のなものでもない。すなわち、こうした場面を設定する意識には小さな偶然の出会いからでも他との交流の機会を捉えようとするヘッセの希望が隠されている、と判断できるのである。とすれば、編集者とそのおぼに對する彼の真摯な態度は、ハリーのそのような期待の非常に謙虚な表現形式と理解される。

もとより、この孤独な心的状態はなにもハリーに限ったことではない。他者との交流を望むという人間本来の欲求を持つにもかかわらず社会の中の存在としての自己がその交流の障害になってしまう孤独と絶望は、程度の如何にかかわらず個人主義においては共通した心的状態である。例えば『ブルネン』第三〇一号での福田幸男氏の報告⁽²¹⁾によれば、ドイツにおいては、神に仕える人間が婚前交渉を持つと、あるいは上半身裸の男女が公衆の面前で睦み合おうと、それらは第三者に対して物理的、物質的被害を及ぼさないが故に他人の干渉を受けざるべき行為であるとされている。しかし、だからといって個人主義において他者に対する興味がなくなるわけではない。上述の開放的行為を偶然にでも目撃

した者は何らかの情緒的刺激を受ける。だからこそ、いわゆる FKK (Freie Körperliche Kultur) の現場を覗き見る人間が実際多々いるのである。実際、このような倫理観は個人主義の建て前に過ぎない。そういった刺激や誘惑に反応する人間本来の欲求は個人主義における倫理規定遵守の意識によって無理矢理に抑制されている、というのが実情なのである。そしてそうだからこそ、逆に自分に害を及ぼさない他人の行為に対して差出口を挟まないような抑制された対応が選ばれた時、その対応とそれを選択した人物は理性的であるとして肯定的評価を受けることになるのである。ただただ、社会秩序の維持を計るための理性的判断として、この抑制が妥当なものとされるのである。しかし、たとえ市民がこうした理性的対応を本心から出た行為であると思ひ込んだにしても、実際に欲求を抑制する対応を選択する時、一抹の孤独を感じない者はないはずである。市民倫理を遵守するにもかかわらずスパイもどきの偵察をする編集者の他人に対する関心は、それ故、人間本来の欲求の表現と理解できるのである。ハリーの自己憎悪が編集者やそのおぼの同情や好感を得たのは、それが他人を巻き込む可能性を有しないからである、というのが個人主義の建て前としての議論であろうが、しかし実際は、編集者すなわち市民が本来持っている欲求とハリーの問題意識とが接点を持っているからなのである。

しかし、ハリーと編集者の間には、この共有した接点を出発点とする相互理解への発展を不可能にする決定的な違いがあった。それは、編集者の自己に対する信頼が孤独を孤独として耐える程十分に強固ではなかった点である。「ああ、ここはいい匂いがしますね」という言葉に対する編集者の反応は、ハリーの倫理観の攻撃的性格に身を晒した不安であった。この不安は、ハリーが市民的な生活を送る人種ではないののではないかという不信感に由来する。そして、この不信感は、ここに自分と倫理観の違う者が生活空間を同じくすることに対する恐怖の裏返し表現である。これは、自分が遵守する倫理規定を常に自覚的な批判に曝すことによってそれを更に実質的なものにする努力を怠る者が抱く恐怖であ

る。すなわち、自己に対する信頼の脆弱さが、編集者の不安を惹起せしめたのである。

そして更に、この自己評価の違いが、市民倫理に対する対応の相違と関係している。すなわち、編集者が他人との関係の中において自他の同一性を求めるのに対して、ハリーはそれを求めない点である。ただし、この同一性とは、自他の全人格の相似性を意味するのではない。これは、平準化された個性の謂である。ここで抽象という言葉が複雑多岐な森羅万象からその本質を選び抜くことと定義すれば、この平準化は個性の抽象によって成立する。人間が社会の中でとるべき態度は個々の場面において変更されねばならない。それを統一的、一義的に倫理としてまとめることが出来るのは、個々別々の個人の立場と状況とが抽象されるからである。そして、倫理はこの抽象によって普遍的である可能性を獲得する。編集者とそのおぼが依拠する倫理はまさしくこの意味で普遍的だったのである。ハリーはこれに対して、強固な自己評価に基づいて倫理の普遍化傾向とは正反対の方向を旨とする個性化⁽²⁾を追及した。もとより、市民の市民倫理は個性そのものを否定するものではない。世俗の基本的倫理を遵守する限り、この個性化によって個人が世間から遊離することはないからである。丁度、編集者のおぼがハリーを最初から好意的に迎えたのと同様に、他人がどんなことにどれだけ悩むかは、その個人の問題であり、他人の与り知らぬことだからである。市民の倫理は個人間の距離を維持する防護壁の役割を果たすのである。しかし、ハリーの立場にあっては、自己の独自性、そしてそれと表裏をなす他人との差異及び断絶が強調される。そして、独自の個性が主張されるだけでなく、第一章で述べたように、更に彼が市民倫理を攻撃する時、個人主義という調整弁によって個性の独自性がある程度容認するという市民社会の柔軟さの限界が突破されてしまったのである。ここにおいて、個性という言葉が負の評価を負うことになる。個人主義倫理の柔軟さに由来する自他関係の希薄さが、自分達には与かり知らぬ倫理観を抱く人間を与かり知らぬ異分子として拒否し、無視するのである。結局、倫理の普遍性に対する

確信の度合は自己評価の程度と反比例することになるのである。

こうして、市民社会に復帰したハリーにとつての、そこでの生活における問題点の整理がようやく可能になる。ハリーの市民の心が市民の心として十全の資格を備えていることは既に述べたが、問題の第一は、市民の本質であるところの普遍的な個人主義倫理観を以てハリーが自他の市民倫理を否定しようとしたところである。これは自己撞着にほかならない。そして、ハリーと市民社会との間の矛盾を孕む関係の第一歩はここで踏み出されたのである。

そして問題の第二は、ハリーの市民性の本質が倫理観のみに限定されなかった点である。更に困難なこの問題は、市民倫理観の論理的基盤である抽象という方法がハリーの批判的知性にまで貫徹していることである。編集者がハリーを口説き落して連れて行った講演会の当初にハリーが編集者に向けて投げた眼差しは、ハリーが一瞬の間に一つの行為によつて全てを表現し尽くすものと編集者には理解された。すなわち、ハリーの知性は個人や時代を超えて人類全体を否定したのである。ハリーはここで市民社会の知性の本質である抽象という方法によつて時間と空間を超越する地平に立った、といえる、だが、人類は本来豊富な個性の集合体ではなかったのだろうか。そして、この抽象によつて看過された個別的事実にも人間に本質的な何かがあったはずである。そういう本質的なものがあるからこそ、ハリーの個体化への道が意義深いのである。にもかかわらず、講演会場でのハリーは、まさしくこの抽象という方法論を用いた眼差しを編集者に投げかけた。そして、この否定の対象に自分をも含まざるを得なかったことは、知的方法論に関してもハリーが自己撞着に陥ってしまったことを露呈しているのである。

繰り返して言えば、ハリーは市民批判の根拠たる彼の知性をまさしくその市民性に依拠していたのである。実際、これこそが近代市民社会における知性の本質である。近代の科学精神における唯一無二の真理の探求は、このような抽象をおいて他に方法的根拠はない。だが、人間についてのそうした真理を見いだす展望が拓かれていない現状では、抽象

は個別の人間の現実に未だ十全に対応できない。それ故、この近代科学精神の絶対的価値規範化が近代、現代の社会を恒常的な実験Ⅱ試みの状態に貶めたとさえなくもない。とすれば、この抽象は人間の個性を剝奪する暴力にほかならないことになる。そして、この抽象を方法的基盤とする知性は、個性を剝奪する暴力装置となる。つまりハリーは、この暴力装置を用いて暴力装置自身を批判する矛盾に陥ってしまったのである。確かに、この方法論をもつてすれば、暴力装置それ自体の矛盾を明らかにすることは出来る。しかし、その矛盾をどのように解決し、超越するかという展望は、暴力装置の拘束の中に居て拓くことは出来ない。暴力装置自体の破壊だけが最大限可能なことである。ハリーの心の中の狼性とは、この破壊のエネルギーの謂である。

しかし、ハリーはこのエネルギーに身を委せることはしなかった。それは、ハリーの心の中の市民性が市民倫理に倅るそのような行為をかうじて押しとどめたからである。ハリーが教授の家で見た振舞は市民の視点から見れば醜態ではあるが、それは彼の市民性が限界状態にあるこのエネルギーを辛くも制御したからにほかならない。また、その後に描かれる、どこにも安住の地を見いだせない疲労と不安と焦燥は、この矛盾の渦に飲み込まれたハリーの市民性がなお存在する証である。

ここにおいて、自己破壊に向かうハリーの狼性と、それを辛うじて止める彼の市民性との拮抗が止揚される契機はどこにも見出されない。ハリーは自己矛盾の渦に閉塞されたままである。彼が市民社会にその解決策を求めるのは、もはや不可能である。

そして、それ故、こうしたハリーの前にヘルミーネが登場するのは、象徴的である。ハリーが別な次元からの導きが必要とする段階に至った丁度その時に別の世界からの導き手が登場したからである。

序論で述べたように、ヘッセは『シッダールタ』における実験の段階を既に通過した。ヘッセの個性的な問題を、個性を捨象した抽象的な議論によって取り扱うことは不可能である。そうだからこそ、ハリーは市

井の市民社会に復帰したのであった。それ故、次に論ずるべき問題点は明らかである。すなわち、『シッダールタ』論で見たように、豊富な個性をそのまま受容する方法を、市井の市民社会の中で、市民として、抽象という方法的根拠を捨てて、いかに具体化できるかである。そして、『荒野の狼』についての論文」や本書の後半部分に現れるヘルミーネやパプロの別な世界からの多くの意見は、この点に関して更に多くのことをこの本から読み取ることが出来る可能性を示唆する。それ故、究極的理想の地平とハリーの立つ位置の距離の測定をもとにして、市民社会におけるヘッセの理想追及の可能性を見ることが次の課題になる。

注

ヘッセの作品からの引用には Hermann Hesse: *Gesammelte Werke*, 12 Bde., Suhrkamp Verlag, 48. bis 57. Tausend, 1982 を使用した。ここでは、これをGWという短縮形で表示する。後続のローマ数字は巻数を示す。

なお、『荒野の狼』から引用するに際して、高橋健二氏の訳書（新潮文庫 昭和五十九年九月二十日第十八刷）を参考にさせていた。また、

- (1) 市岡正適『合理の無意識——『デミアン』の場合』、埼玉医科大学進学課程紀要第三号（一九八四年）所収、一頁—十四頁。
- (2) 市岡正適『『シッダールタ』における自我の形式と時間の超克』、埼玉医科大学進学課程紀要第四号（一九八六年）所収、一頁—十頁。
- (3) 「編集者の序文」が市民から見たハリーの距離を示す点については、次のような記述を参考にした。「全体がハリーの自叙体の物語は、また、荒野の狼という本の編集者を務める市井の人間の報告によって距離を置かれぬ。」M. R., Orpid, Jg. 4, Heft 5/6, 1927/1928, S. 54 ff. ただし、この引用は Hermann Hesse im Spiegel der Zeitgenössischen Kritik, Francke Vlg., 1975, S. 262. に引いた。
- (4) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, (GW VII. S. 184)
- (5) Vgl. Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, (GW VII. S. 185) ここには「それ（ハリー）に対する印象は、良いものではありませんでした。」（括弧内市岡）という表現が見える。
- (6) Vgl. Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, (GW VII. S. 183) ここには

「しかし、私は彼の個性から強い印象を、そして、それでも好感の持てる印象を受けたと言わざるを得ません。」という表現が見える。

- (7) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 184.
- (8) Vgl. Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 187.
- (9) *ibid.* 括弧内市岡
- (10) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 186.
- (11) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 187.
- (12) *ibid.*
- (13) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 191.
- (14) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 192.
- (15) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 191.
- (16) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 192.
- (17) *ibid.*
- (18) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 183.
- (19) *ibid.*
- (20) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 272.
- (21) 福田幸夫『西ドイツの若き女性たち』、『Brunnen』三〇一号（郁文堂一九八八年三月）所収、九頁—十一頁。
- (22) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 248. この語は「荒野の狼」についての論文」中に現れる。すなわち、人間が生を受けてこの世に産まれることが全体からの分離としての個体化であり、そして、個体化を止揚することが全体への復帰＝神になるのである。ここではハリーの思想が批判されている。また、この「荒野の狼」についての論文」の他の箇所では、この語の動詞が現れる。そこでは、単に市民社会の生活や倫理からの離脱の意味として用いられている。Vgl. Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 234.
- (23) Hesse, H.: *Der Steppenwolf*, GW VII. S. 272.